

大学生における内集団バイアスと 個人・集団自尊心の関連： 報酬分配課題を用いた検討

宮代 こずゑ，扇谷 昌克

宇都宮大学共同教育学部研究紀要 第72号 別刷

2022年3月

大学生における内集団バイアスと 個人・集団自尊心の関連： 報酬分配課題を用いた検討

Association between the in-group bias and individual/group self-esteem of college students: A study using a reward distribution task

宮代 こずゑ[†]・扇谷 昌克[‡]

MIYASHIRO Kozue and OHGIYA Masakatsu

概要 (Summary)

本研究は、自分が所属する集団に対してはより好意的な評価がなされる傾向、すなわち内集団バイアスに焦点を当て、個人・集団自尊心との関連について検討を行った。実験は大学生を対象に実施され、内集団と外集団それぞれに対する報酬分配額が記録されていた。結果からは、内集団バイアスと正の相関があるのは個人の自尊心であるという従来の社会的アイデンティティ理論が支持され、Luhtanen & Crocker (1991) の報告とは一致しなかった。また、十分に高い集団自尊心に支えられている群は、外集団に対してより寛容にふるまう可能性が示された。

キーワード：内集団バイアス 社会的アイデンティティ 報酬分配課題

Keywords: in-group bias social identity reward distribution task

1. 問題と目的

(1) 内集団バイアスに関する諸研究

内集団バイアスとは、自らが所属する集団（内集団）に対して、好意的な評価・行動を生起させる一方、自らが所属しない集団（外集団）には否定的な評価・行動を生起させる傾向（横田・結城、2009）^[1]を指す。

この内集団バイアスは集団間の地位や集団内の地位によって程度が変化することが分かっている。たとえば杉浦・坂田・清水（2015）^[2]は、高地位集団の中でも低地位者が、低地位集団の中でも高地位者が、外集団メンバーを低く評価することを明らかにした。

内集団バイアスを検討する実験はこれまでも数多くなされている。このバイアスを測定するための手続きのひとつとして、実験参加者が内集団の1人と外集団の1人に実験参加報酬を分配する、報酬分配課題がある（たとえば、鈴木・金野・山岸、2007；正高・釘原、2015）^{[3] [4]}。この実験において、実体性の低い集団（最小条件集団）間であっても、外集団成員に対して少なく、内集団成員に対してはより多く報酬を分配する傾向が確認されている（正高・釘原、2015）^[4]。

[†]宇都宮大学 共同教育学部

[‡]宇都宮大学 教育学部 卒業生

内集団バイアスには、内集団をポジティブに評価する傾向、外集団をネガティブに評価する傾向、内集団と外集団との差を拡大する傾向の3要素が含まれている。この3要素の中でも特に、内集団をポジティブに評価する傾向が多くみられているようである(亀田・村田, 2010) [5]。

(2) 社会的アイデンティティ理論と自尊心

内集団バイアスの説明原理として代表的なものに、Tajfel & Turner (1979) [6] が提唱した社会的アイデンティティ理論が挙げられる。人の自己概念には、自分の考え方や性格特徴などの個人的アイデンティティが存在する。それに対し、ある集団の一員としての自己定義も存在し、これを社会的アイデンティティと呼ぶ。

また、一般的に人は自尊心を維持し、高揚しようと動機づけられている。社会的アイデンティティ理論ではこれを、社会的アイデンティティを通じて行われるとされている。これは、内集団を外集団と比較して肯定的に認知することと、それを自己概念に取り入れることによって自分もまた肯定的に認知することからなっている(亀田・村田, 2010) [5]。たとえば、内集団と外集団を比較するときに、好ましい成員同士では内集団成員が、好ましくない成員同士では外集団成員が高く評価されることがあり、これを黒い羊効果(black sheep effect)と呼ぶが、この現象の説明として用いられるのが社会的アイデンティティである。すなわち、人は自分の所属集団から社会的アイデンティティを得ているため、社会的アイデンティティを好ましい状態に保とうとする。しかし、内集団に好ましくない成員がいた場合、内集団から得る社会的アイデンティティの価値や評価が脅かされるため、そのような成員は低く評価され、心理的に切り離される(大石, 2001) [7]。

ただし、報酬分配課題のような、各集団の実験参加者に分け与えられる分配金以外に内集団と外集団とを比較するための評価軸が存在しない場合、実験参加者は自己の所属する集団と他の集団とを比較するために唯一利用可能な「分配金額」において、自己の集団を高く評価することができるように、内集団成員に金額を多く分配すると考えられている(渡辺, 1994) [8]。

Luhtanen & Crocker (1992) [9] は、こうした社会的アイデンティティ理論に従うならば、内集団バイアスと関連するのは「個人の」アイデンティティよりも社会的アイデンティティの側面であること、それにもかかわらずこれまでの自尊心に関する研究が問題にしてきたのは「個人的な」能力や特性に関する自己評価の側面だったことを主張した。Luhtanen & Crocker (1991) [10] は自らが作成した集団自尊心尺度と従来の自尊心尺度を用いた実験を行い、内集団バイアスと関係しているのは集団自尊心であることを示した。

(3) 本研究の目的

国内では、上述のような内集団バイアスと社会的アイデンティティとの関連を検討した研究は多くない。内集団バイアスは偏見や差別的行動を導くことがあり、学校現場におけるいじめ問題とも関連が深いと考えられる。つまり、内集団バイアスと関連する諸要因を明らかにすることは、これらの社会問題を解決するための一助となるだろう。

そこで本研究では社会的アイデンティティ、個人・集団自尊心と内集団バイアスの関連について実験的に検討を行う。今回、社会的アイデンティティとして尾関・吉田(2007) [11] の集団アイデンティティ尺度を、個人の自尊感情としてRosenberg(1965) [12] の自尊感情尺度を使用する。

仮説として、以下2点を提起する。①内集団バイアスの説明原理とされている社会的アイデンティ

ティは、内集団バイアスと正の相関がある。②今回行う報酬分配課題は、内集団成員・外集団成員を意識しやすい課題であるため、個人の自尊感情よりも集団自尊心の方がより強い正の相関を示す。

2. 方法

(1) 実験参加者 大学生31名（男性8名、女性23名、平均年齢 19.16 ± 1.35 歳）。これに加え、実験協力者4名（すべて男性、平均年齢は 21.50 ± 1.50 歳）がサクラとして参加した場合もあった（後述）。各実験における参加者の男女数と、その内実験に参加したサクラの人数をTable 1に示す。

Table 1. 実験における参加者の男女数とサクラの参加数

実験 グループ	男性	女性	内サクラ
1	1	3	1
2	2	2	2
3	3	1	1
4	3	1	3
5	2	2	2
6	1	3	1
7	1	3	1
8	0	4	0
9	2	2	1
10	1	3	1

注) サクラは全4名であり、平均年齢は 21.50 ± 1.50 歳であった。

(2) 手続き

実験は4人1組で行われた。参加者の都合上4人集まらなかった場合は、サクラが実験に参加した。なお、サクラが参加した回において、実験参加者にはサクラが参加していることは伝えずに実験を実施した。

実験参加者は実験室入室後、まずは各自好きな席に座り、実験で使用する質問紙等が入ったクリアファイルを実験者から受け取った。実験を開始する前に、実験の流れと倫理的配慮に関して説明をし、実験へ参加することについての同意書への記入を求めた。

その後、内集団を形成するためのダミーの課題として、先行研究（正高・釘原，2015）^[4]に従い絵画選好課題を実施した。絵画選好課題にはワシリー・カンディンスキー（Wassily Kandinsky）とパウル・クレー（Paul Klee）の作品を用いた。実施の際は「絵の好みの調査」として参加者へ教示した。参加者は7ページに渡りそれぞれ2枚の絵画が印刷された小冊子と、別紙の回答用紙を使用した。全7ペアの絵画の中で、それぞれ自分の好みに合う絵画に丸をつけるよう求めた。回答後に実験者は回答用紙を回収し、結果を集計すると伝えて席を外した。実際には実験者はこの間、絵画選好課題の集計は行っておらず、2分間待機していた。

実験者は2分後に実験室へ戻り、「絵の好み が似ていた参加者同士がペアになるように分けた」と説明をし、各参加者にペア番号を記載した用紙を配布した。そしてペア番号が同じ参加者が隣り合わせになるように席替えをしてもらった。

次に、調査協力のお礼として支払われる謝金の金額に関わる課題と称して、報酬分配課題を行った。報酬分配課題とは、元手となる500円をペア相手1人とペアでない参加者1人に分配する課題である。この際、分配金額は1円単位で自由に分配できること、「参加者自身が貰える謝金の金額はペア相手とペアでない参加者から分配された金額の合計である」こと、および誰から何円分配されたのかは明示されないことを説明した上で実施した。

続いて質問紙調査を行った。質問紙で使用した尺度は以下の通りである。

集団アイデンティティ尺度 尾関・吉田 (2007) ^[11] の集団アイデンティティ尺度の「部活動・サークル」の部分で、「所属している集団」という表現に変更し使用した。「私は所属している集団の中心にいる」、「この集団に所属していることは、私のイメージを決定する重要な要素だ」などの全12項目、「1：あてはまらない」から「5：あてはまる」の5件法で回答を求めた。

集団自尊心尺度 Luhtanen & Crocker (1992) ^[9] の Collective Self-Esteem Scale を和訳した、日本語版集団自尊心尺度 (渡辺, 1994) ^[8] を使用した。「自分が分類されている様々な社会集団について自分がどのような感情を抱いているかは、わたしにとっては大切なことだ」、「平均すれば、わたしが分類される様々な社会集団は、他の集団と同じくらいうまく物事を進めることができる」などの全16項目、「1：まったくそう思わない—7：非常にそう思う」の7件法で回答を求めた。

自尊感情尺度 Rosenberg (1965) ^[12] の尺度を翻訳した自尊感情尺度 (桜井, 2000) ^[13] を使用した。「私は自分に満足している」、「私は自分が、少なくとも他人と同じくらいの価値がある人間だと思う」などの全10項目、「1：いいえ」から「4：はい」の4件法で回答を求めた。

なお、質問紙の初めに「私たちは様々な集団に所属しながら生活しています (例：クラス、部活・サークル…)。ここでは、あなたが所属する集団について普段どのように感じているか、あなたの集団への関わり方をお尋ねします。はじめに、ここまでの文を読み、あなたが想定した集団はどのような集団かお聞きします。」という教示文とともに、「クラス、部活動等、バイト先、その他」の中で想定した集団に丸を付けるよう求めた。その他に丸を付けた人は想定した集団を空欄に自由記述してもらうよう求めた。

質問紙調査終了後、本来の実験の目的を改めて説明し、実験データを研究へ用いることについての同意書への記入を求めた。加えて、報酬分配課題において、「分配された額が実際に自分の (あるいは相手の) 報酬額になる」というルールをどの程度信じて回答したか、「1：全く信じていなかった」から「7：とても信じていた」の7件法で回答を求めた。

この実験の所要時間は約40分であった。

3. 結果と考察

(1) 分析前処理

本研究では、報酬分配課題において自分のペア相手 (内集団成員) へ分配した金額を内集団バイアスの指標とした (たとえば、内集団成員に300円、外集団成員に200円分配した場合、内集団バイアスとして「300」を分析に使用する)。なお、報酬分配課題における内集団成員への分配金額と各尺度の基本統計量、および α 係数はTable 2に示す。

Table 2. 内集団成員への分配金額と各尺度の平均値と標準偏差

	α 係数	全体 ($N=31$)		男性 ($N=8$)		女性 ($N=23$)	
		M	SD	M	SD	M	SD
分配金額	-	260.26	24.52	260.50	25.90	260.17	24.63
集団アイデンティティ	.825	42.55	7.54	42.75	6.34	42.48	8.05
集団自尊心	.840	82.42	10.43	81.25	12.62	82.83	9.85
個人の自尊感情	.856	25.55	6.03	28.75	5.06	24.44	6.04

(2) 内集団バイアス生起の確認

まずは内集団バイアスが生じていたことを確認するため、報酬分配課題における内集団成員への分配金額について、報酬の平等分配を意味する250円を基準値とした1サンプル t 検定を行った。その結果、有意差が認められた ($t(30) = 2.330, p = .027$)。内集団への分配金額が250円よりも有意に高かったことから、報酬分配課題において、内集団バイアスが生じたことが確認された。

(3) 内集団バイアスと各尺度との関連

内集団成員への分配金額（すなわち、内集団バイアス）と集団アイデンティティ合成得点、集団自尊心合成得点、個人の自尊感情合成得点においてそれぞれ相関分析を行った。

その結果、集団アイデンティティと集団自尊心、集団アイデンティティと個人の自尊感情、集団自尊心と個人の自尊感情においてのみ有意な相関が見られた（順に、 $r = .80, p < .001$; $r = .41, p = .023$; $r = .48, p = .007$ ）。

この結果から、各尺度がそれぞれ相関関係にあると考えられるため、2変数以外を統制変数とした偏相関分析を行った（Table 3）。その結果、内集団バイアスと集団アイデンティティ ($r = .455, p = .013$)、内集団バイアスと集団自尊心 ($r = -.365, p = .052$)、集団アイデンティティと集団自尊心 ($r = .758, p < .001$) にのみ有意及び有意傾向の相関が認められた。

Table 3. 内集団成員への分配金額と各尺度との偏相関分析

	1	2	3	4
1 分配金額	-			
2 集団アイデンティティ	.455 *	-		
3 集団自尊心	-.365 +	.758 **	-	
4 個人の自尊感情	-.108	.049	.273	-

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

この結果より、内集団バイアスと社会的アイデンティティは正の相関関係にある（仮説①）ことが示された。一方で、内集団バイアスと自尊感情には正の相関が見られず、さらに内集団バイアスと集団自尊心に関しては負の相関関係にあるという結果になり、これは「個人の自尊感情よりも集団自尊心の方が、内集団バイアスとのより強い正の相関を示す」という仮説②とは一致しない。

内集団バイアスと集団自尊心が負の相関を示した点について、報酬分配課題において平等分配を示す250円を回答した参加者が多数いたことが理由として考えられる。内集団成員へ250円を分配した参加者は31名中20名であった（Table 4）。今回行った報酬分配課題は1円単位で自由に分配金額が決められる反面、具体的な金額を自身で想像し、回答しなければならない。中にはなかなか分配金額を決められず、熟考せずに250円と回答したという参加者が少なからずいたと推察される。このように回答の自由度が高く、回答を決めかね、内集団成員にも外集団成員にも損が生じないよう、とりあえず平等分配を選択するというのを防ぐために、藤井（2014）^[14]が使用した分配マトリクス（Table 5）を使い、報酬分配課題を行うことが良いと考えられる。分配マトリクスを使用すれば、平等分配が選択できない代わりに、選択できる数字の上限、下限が決まっているため、本研究で行った報酬分配課題よりも回答に困ることはなく、今回の結果とは異なる実験結果が得られる可能性がある。

Table 4. 報酬分配課題における250円を基準とした参加者の分配金額の内訳

	250 円未満	250 円	250 円以上
回答者数	2	20	9

Table 5. 報酬分配マトリクス

内集団ひいき マトリクス														
内集団	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
外集団	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1

注）参加者は上下の数字の組み合わせを選択し、数字の対に丸を付ける。

（4）各尺度得点における高群・低群の比較

まず、集団アイデンティティ及び集団自尊心それぞれの尺度合計得点について、平均値以上得点していた参加者を高群、平均値以下の得点だった参加者を低群に分けた。そのうえで、集団アイデンティティ（高／低）及び集団自尊心（高／低）を独立変数、内集団成員への分配金額（すなわち、内集団バイアス）を従属変数とした2要因参加者間分散分析を行った。

その結果、集団アイデンティティ（高／低）の主効果が有意（ $F(1, 27) = 5.94, p = .022, \eta_p^2 = .18$ ）であり、集団アイデンティティが高い群のほうが低い群よりも内集団バイアスが大きく生じていた。また集団自尊心の主効果が有意傾向（ $F(1, 27) = 3.36, p = .073, \eta_p^2 = .11$ ）であり、集団自尊心が低い群のほうが、高い群よりも内集団バイアスが大きく生じていた。

さらに、それぞれの交互作用が有意傾向（ $F(1, 27) = 3.50, p = .072, \eta_p^2 = .12$ ）であった（Figure 1）。

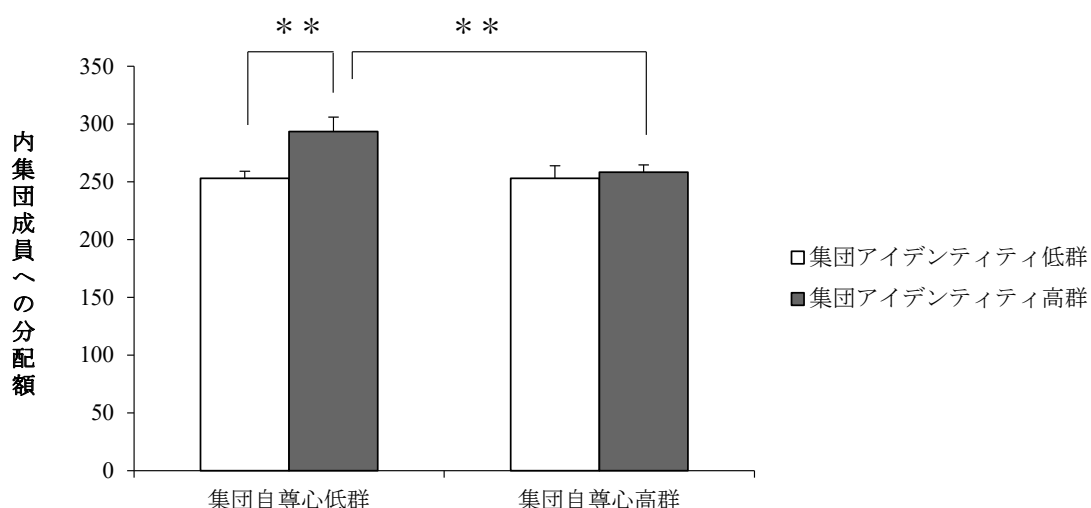


Figure 1. 各群の分配金額の平均値 (エラーバーは標準誤差)

従って単純主効果の検定を実施したところ、集団アイデンティティが高い群における「集団自尊心(高/低)」の単純主効果が有意 ($p = .009$; 結果①) であり、集団自尊心が低い群のほうが、高い群よりも内集団バイアスが大きく生じていた。しかしこの効果は集団アイデンティティが低い群においては認められなかった ($p = .995$)。また、集団自尊心が低い群における「集団アイデンティティ(高/低)」の単純主効果が有意 ($p = .003$; 結果②) であり、集団アイデンティティが高い群のほうが、低い群と比べて、内集団バイアスが大きく生じていた。しかしこの効果は集団自尊心が高い群においては認められなかった ($p = .707$)。

結果①から、集団アイデンティティが高く、集団自尊心が低い参加者たちが、集団アイデンティティが高く、集団自尊心が高い参加者たちよりも、内集団バイアスが大きく生じていることが示唆された。どちらの群も集団アイデンティティが高いため、集団内におけるアイデンティティを高く維持しようとし、内集団成員に多く報酬を分配すると考えられる。しかし、その中でも集団自尊心が高い人は、他の参加者よりも相対的に集団を強く意識してしまい、自分のペアだけでなくペア以外の参加者のことも考え、絵画の好みだけで貰える謝金額に差がつくのは不公平だという思いが生まれ、分配金額に大きく差をつけられなかったとも考えられる。一方で集団自尊心が低い参加者は、ペア相手およびペア以外の参加者に関して、集団自尊心が高い参加者よりも損得感情等を感じにくく、深刻に考えずに素直に分配金額に大きな差をつけられたのではないだろうか。

また結果②より、集団自尊心が低く、集団アイデンティティが高い参加者たちが、集団自尊心が低く、集団アイデンティティが低い参加者たちよりも、内集団バイアスが大きく生じていることが示唆された。これは結果①と同様、集団自尊心が低く、集団アイデンティティが高い参加者たちは、集団内におけるアイデンティティを高く維持しようと内集団成員に多く報酬を分配すると考えられる。一方で、集団自尊心、集団アイデンティティがともに低い参加者は、集団内におけるアイデンティティを高く維持しようといった意識が弱いため、内集団成員に対して分配する金額がさほど多くなかったと考えられる。

次に、集団アイデンティティ及び「個人の」自尊感情について、同様に、集団アイデンティティ(高

／低)及び個人の自尊感情(高／低)を独立変数,内集団成員への分配金額(すなわち,内集団バイアス)を従属変数とした2要因参加者間分散分析を行った。その結果,先ほどの分析と同様,集団アイデンティティ(高／低)の主効果が有意傾向($F(1, 27) = 3.360, p = .078, \eta^2 = .110$)であり,集団アイデンティティが高い群の平均値が大きいことが確認された。また,個人の自尊感情の主効果($F(1, 27) = 0.481, p = .494, \eta^2 = .017$),及びそれぞれの交互作用($F(1, 27) = 1.859, p = .184, \eta^2 = .064$)については有意ではなかった。

さらに,集団自尊心及び個人の自尊感情について,同様に,集団自尊心(高／低)及び個人の自尊感情(高／低)を独立変数,内集団成員への分配金額(すなわち,内集団バイアス)を従属変数とした2要因参加者間分散分析を行った。その結果,集団自尊心の主効果($F(1, 27) = 0.370, p = .548, \eta^2 = .014$),個人の自尊感情の主効果($F(1, 27) = 0.008, p = .930, \eta^2 = .003$),それぞれの交互作用($F(1, 27) = 0.234, p = .633, \eta^2 = .009$)のいずれも有意ではなかった。

(3) 分配金額と課題信頼度との関連

報酬分配課題における分配金額と報酬分配課題の信頼度(分配された金額がそれぞれの実験参加報酬になるということをどの程度信じていたか;全課題終了後に7件法で測定)について,相関分析を行った結果,有意傾向の負の相関が確認された($r = -.320, p = .079$)。

そこで,報酬分配課題を信頼していた群(7件法のうち,5,6および7のいずれかに回答した群)と信頼していなかった群(7件法のうち,1,2および3に回答した群)に分け,それぞれ分配金額と相関分析を行ったその結果,信頼していた群には相関関係が認められなかったが,信頼していなかった群は有意傾向の負の相関が認められた(順に, $r = -.350, p = .120$; $r = -.654, p = .056$)。

課題を信頼していた場合,自分の分配金額によって参加者の貰える金額に差が出てしまい,後ろめたい気持ちが生じ,大きく分配金額に差をつけることができなかった可能性がある。一方,課題を信頼していない場合,内集団成員と外集団成員の分配金額に大きな差をつけたとしても,最終的に自身が貰える報酬金額には影響がないと考え,気楽に分配課題に取り組むことができたと考えられる。このことから,課題を信頼しているか,信頼していないかで実験結果が大きく異なる可能性があり,今後の研究では課題の信頼度も一つの重要な指標になるだろう。

(4) まとめと展望

本研究は,内集団バイアスとより強く関連するのは個人の自尊心と集団自尊心のどちらかという点に焦点を当て,実験的な検討を行った。その結果,内集団バイアスと正の相関があるのは個人の自尊心であるという従来の社会的アイデンティティ理論が支持され, Luhtanen & Crocker (1991) の報告とは一致した。

上記の結果と,参加者全体を集団自尊心が高い群と低い群とに分けて行った分析結果からは,十分に高い集団自尊心に支えられていると外集団に対してより寛容にふるまう可能性が示された。こうした傾向は,日本人を対象とした場合特有の結果なのかという点については,今後さらなる検討が望まれる。

また,今後さらに日本文化圏での内集団バイアスの生起メカニズムを詳細に検討することで,日本における差別,いじめ等の社会問題の解決策を考案する上での一助となるだろう。

4. 引用文献

- [1] 横田 普大・結城 雅樹 (2009). 外集団脅威と集団内相互依存性——内集団ひいきの生起過程の多重性—— 心理学研究, 80, 1-9.
- [2] 杉浦 仁美・坂田 桐子・清水 裕士 (2015). 集団間と集団内の地位が内・外集団の評価に及ぼす影響——集団間関係の調整効果に着目して—— 実験社会心理学研究, 54, 101-111.
- [3] 鈴木 直人・金野 祐介・山岸 俊夫 (2007). 信頼行動の内集団バイアス——最小条件集団を用いた分配者選択実験—— 心理学研究, 78, 17-24.
- [4] 正高 杜夫・釘原 直樹 (2015). 集団形成過程が内集団バイアスに及ぼす影響 対人社会心理学研究, 15, 95-99.
- [5] 亀田 達也・村田 光二 (2010). 複雑さに挑む社会心理学——適応エージェントとしての人間—— 改訂版 有斐閣アルマ.
- [6] Tajfel, H. & Turner, J. C. (1979) . *An integrative theory of intergroup conflict*. In W. G. Austin & S. Worchel (Eds.) , *The social psychology of intergroup relations*. Monterey, CA: Brooks/Cole. 33-47.
- [7] 大石 千歳 (2001). 黒い羊効果 山本 眞理子・外山 みどり・池上 知子・遠藤 由美・北村 英哉・宮本 聡介 (編) 社会的認知ハンドブック (p.130) 北大路書房.
- [8] 渡辺 聡 (1994). 日本語版集団自尊心尺度構成の試み 社会心理学研究, 10, 104-113.
- [9] Luhtanen, R., & Crocker, J. (1992) . A collective self-esteem scale: Self evaluation of one's social identity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 18, 302- 318.
- [10] Luhtanen, R., & Crocker, J. (1991) . *Self-esteem and ingroup comparisons: Toward a theory of collective self-esteem*. In J. Suls & T. A. Wills (Eds.) , *Social Comparison: Contemporary Theory and Research*. Lawrence Erlbaum, 211-234.
- [11] 尾関 美吉・吉田 俊和 (2007). 集団内における迷惑行為の生起及び認知——組織風土・集団アイデンティティによる検討—— 実験社会心理学研究, 47, 26-38.
- [12] Rosenberg, M. (1965) . *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- [13] 桜井 茂男 (2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 65-71.
- [14] 藤井 勉 (2014). 顕在的・潜在的自尊感情の不一致と抑うつ・不安および内集団ひいきの関連 心理学研究, 85, 93-99.

令和3年10月1日受理

Association between the in-group bias and
individual/group self-esteem of
college students: A study using a reward
distribution task

MIYASHIRO Kozue and OHGIYA Masakatsu